

審査の結果の要旨

氏名 鳥居明雄

能と説経という中世を代表する文芸の二大ジャンルは、素材や出自においては多くの重なりを持つものの、表現としてはきわめて対照的なありようを示している。能と説経の、それぞれに異なる表出の論理は、例えば、鎮魂(定着)と漂泊(逸脱)、浄化と受難、過去と現在といった諸項の対立として捉えられる。本論文は、そうした対立を踏まえつつ、二つのジャンルの「世界認識や存在認識をめぐる構造的な相関」を明らかにすることで、中世芸能の深層にある精神世界のありように光をあてようとするものである。

本論文の論述は、能と説経の様式的な対立の根底に存する、存在了解の共通性を見定めるところから出発する。筆者はまず、複式夢幻能におけるシテの形象の生成・消滅のプロセスに注目する。シテは、曲の冒頭、無人称・不定形の「それ」として登場し、ワキとの対話の集積とともに、その個別的な形象をあらわにする。対話の総体として現れた「形」は、後場の舞において純化され、懺悔の言葉とともに解体し、消失する。筆者は、かかるプロセスに、能の様式を根底で支えている存在認識を見いだす。すなわち現世の祝福を意志する能が、その祝福を、贖罪という形での浄化において表現せざるをえなかったことは、能が、我々の生の原質を、贖罪の基体としての「形」として捉えていたということを物語っている。いいかえれば、能の根底的な存在認識は、形あることの痛みには他ならない。能の鎮魂・招福への意志は、その論理を貫くために、形あることの痛みとしての生を前提せざるを得ない。筆者は、この逆説的構造にこそ、能の様式美の根源があったとするのである。

祭式と存在との葛藤という逆説的構造は、能と説経が交差し分化していく出発点でもある。筆者はその交差のさまを、子の供犠を主題とする能と、子の受難をテーマとする説経との比較を通して明らかにしつつ、贖罪の語りが隠蔽する生命の力の噴出口として、説経を位置付ける。

説経は、核となる登場人物の形象を、受難する「子」として表現する。祭式の原理に強く規定される能が、生を反復の相において語るのに対し、説経はすでに生じてしまったものとしての生の帰趨を語ろうとする。申し子、あるいは、父や母の不在における「子」の形象は、生を不可逆性の相で捉える説経の基本的な表出装置である。そして、説経表現の持ち味ともいべき奔流する情の過剰は、この不可逆性への執着のエネルギーに支えられた、様式ならざる様式ともいべきものであるとされる。

以上、本論文は、従来主に伝承論や系譜論の観点から言及されてきた能と説経の関係を、存在認識に関わる「構造的相関」として明らかにしたものであり、近世人倫思想の前提となる中世の家族観や共同体倫理に関するきわめて重要な新知見を提示している。ただ全体的に、個々の作品の素材論・伝承論等についての論述にやや厚みを欠くきらいがあるが、その点は副論文『鎮魂の中世』『漂泊の中世』において実証的に追究されたところであり、その成果に依拠する本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本審査委員会は本論文が博士〔文学〕の学位に相当するものと判断する。